マッカーサーの遅すぎた悔恨

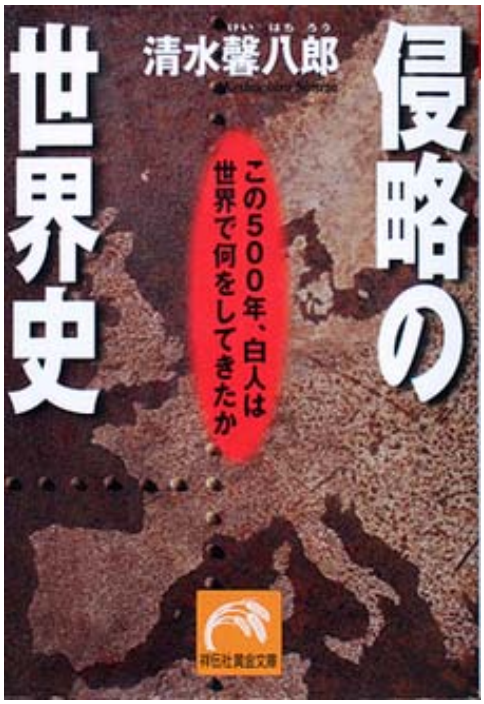
2008/09/15 10:36

マッカーサーの占領政策が、敵対から途中で同盟に大転換したのは、昭和25年に突如発生した朝鮮動乱からだ。日本に自衛隊の創設を認め、防衛の協力者にすることに方針が一変した。
朝鮮戦争とは、共産圏のソ連と中国が北朝鮮を唆（そそのか）し、韓国に侵入させたもので、中ソとアメリカの代理戦争であった。米国はそれまで中ソは連合国側で仲間と考えて、北に対して何の防備もしていなかった。

ここで初めて、マッカーサーは、かって日本が戦った日清戦争、日露戦争を一緒にしたものを、日本に代わって米軍が戦わされているということに気がつくのだ。そしてマッカーサーは、日本の過去の戦争がすべて中ソに対する自衛のためのものであったと、初めて確信するのである。

これを契機に、アメリカ自身も、スターリンの罠に掛かっていたことに気がつくのだ。これから米ソ対立の冷戦が始まる。米国の真の敵は、日本でなくソ連だったのだ。

せっかくアジアの防共の一大勢力となっていた日本を米国が潰してしまった結果、支那大陸はほとんどすべて共産圏に編入され、朝鮮戦争とベトナム戦争という二つの戦争で、アメリカは、日米戦争以上の数十万人という手痛い被害を受けることになってしまった。
朝鮮戦争への反省から、アメリカはサンフランシスコでの対日講和会議にソ連の参加を拒否し、日本への賠償要求も放棄したのである。



これは清水馨八郎著「侵略の世界史」（祥伝社黄金文庫、定価600円＋消費税）の中の一説（286-287ページ）です。現在、パール判事の「日本無罪」判決を巡って、小林よしのりと中島岳志・西部邁との論争が続いてます。

私の独断と偏見で云わせてもらえば、パール判事は「自分たちが世界で散々侵略、略奪、殺戮の限りをしておいて何を言っている。裁く資格なし、日本は無罪！」と云っているのだと思います。

で、その白人国家の侵略の様子を簡潔に表しているのがこの「侵略の世界史」と云うわけです。日本は戦前悪いことをした、日本は取り返しのつかない侵略戦争を起こしてしまった、永遠に謝らなければならない、などと思っている自虐史観にどっぷり浸かっている皆さん。是非読んでみて下さい。

カテゴリ：コラむ　フォルダ：指定なし　　コメント(0)

タグ：侵略　世界史　自虐史観　パール判決　小林よしのり